



TITLE:

中世イングランドの鋳貨 (大野英二教授記念號)

AUTHOR(S):

本山, 美彦

---

CITATION:

本山, 美彦. 中世イングランドの鋳貨 (大野英二教授記念號). 經濟論叢  
1985, 136(4): 473-497

ISSUE DATE:

1985-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/134099>

RIGHT:

# 經濟論叢

第136卷 第4号

大野英二教授記念號

---

献 辞 .....	山 田 浩 之	
J. ハーバーマスにおける批判的社会理論の 倫理的基盤 .....	平 井 俊 彦	1
競争・独占・独占禁止法 .....	越 後 和 典	22
1932年のアエッリ提言をめぐる覚書 .....	丸 山 優	39
19世紀末ドイツのオリエント認識 .....	杉 原 達	60
第一次大戦期ドイツにおける住宅政策の展開 .....	後 藤 俊 明	80
日中戦争前中国安徽省における茶統制政策 .....	川 井 悟	111
リッカーとランプレヒト論争 .....	奥 田 隆 男	130
中世イングランドの鋳貨 .....	本 山 美 彦	149

大野英二 教授 略歴・著作目録

---

昭和60年10月

京都大學經濟學會

## 中世イングランドの鑄貨

本 山 美 彦

### は じ め に

銀の採掘はヨーロッパの暗黒時代には衰退しきっていた。が、ヨーロッパの10世紀から13世紀の商業的復活とともに採掘も回復傾向を一時的に見せたこともある。ドイツでは10世紀にゴスラー (Goslar) 鉱山、12世紀にフライブルク (Freiburg) 鉱山が開発され、イタリアではトスカナ (Tuscany) とサルディニア (Sardinia) の旧鉱山で銀が採掘された。しかし、これら旧鉱山も14世紀には枯渇してしまった。他方で、商業が復活しても、貴金属を引き寄せるどころか東方へ流出させることの方が多かった<sup>1)</sup>。当時のヨーロッパの貨幣供給の正確なところは分からない。しかし、商業の拡大テンポに金銀の供給の深刻な立ち遅れがあったことは容易に想像される。地金の物的不足を補うだけの信用機構の整備もなかった。これは、徴利禁止の教会法、およびイタリア系銀行のあまりにも大きな支配力のゆえに、国民経済的視点からの国民的銀行を設立する機会にヨーロッパ各国が恵まれなかったからである<sup>2)</sup>。現象的には、過度の悪铸、自国に不利な為替レート、貿易の逆調、金銀比価の絶えざる変動に悩まされ、中世を通じてヨーロッパは、貨幣供給不足を深刻化させていたのである。少なくとも、17世紀までは価値の安定した鑄貨の豊富な供給ということが、ナショナリストにとっての最重要な課題であったことは確かである。にもかかわ

1) Lopez, R. S., 'Back to Gold, 1252', *The History Review*, 2nd series, vol. ix, no. 2, 1956. p. 233. および, Postan, M. M., 'The Rise of a Money Economy', *Economic History Review*, vol. xiv, 1944.

2) Feavearyear, A. E., *The Pound Sterling*, London, 1931, 邦訳, 一ノ瀬鷹, 川合研, 中島将隆, 『ポンド・スターリング』新評論, 1984年, 51ページ。

らず、今日の整備された金融構造を前提として過去の重金主義者 (bullionist) の貨幣観を幼稚であると切り捨てる常識がいまなお思想史には存在しているように思われる。本稿では、経済史 (金融史) の中に重商主義理論をはめこみ直し、併せて近代に至る貨幣のもつ意味を再発見しようとすることに課題を置く。

原理的に言っても、金銀はそのままでは貨幣にならない。一般的等価物が貨幣形態になり、貨幣の実体が商品貨幣であるという類の浅い理解では、貨幣史の現実によってあっさりと足元をすくわれてしまうであろう。鑄貨の額面価格の方が地金価格を上まわらないかぎり地金の鑄貨への転形は実現しないし、しかも、この額面価格と地金価格との差額は各国ごとに異なるのである。ここに両価格のスパイラル的上昇現象が生じる。それだけではない。財政基盤の脆弱なヨーロッパの各王室は額面価格から鑄造税 (seigniorage) を差引いた額を鑄造価格 (mint price) として地金持ち込み人に渡していた。この鑄造税が王室の国庫に入り、鑄造価格が事実上の地金買入れ価格となっていたのだが、地金の鑄貨化にあたっては、額面価格、鑄造税、鑄造価格、地金の市場価格の4者が、相互に関連していた。この関連の仕方、4者の比率も各国ごとに大きく異なっていたのである。これだけではない。標準金、標準銀の純度も国ごとに差異がある。これに貿易収支、資本収支、事実上の金利 (中世の徴利禁止下では為替レートの開きが実質的な金利になっていた) をきめる外国巨大銀行の操作性、等が安定した価値の貨幣鑄造をきわめて困難なものにしていた。しかも、中世から近世にかけてのイングランドはアントワープ、アムステルダム金融的支配下に入っていたのである。このような状況下で地金価格通りの鑄造価格を良心的に実現させても、為替レートを加味したときの、より有利な鑄造価格を提供する外国があれば、国内鑄貨はすぐさま溶解されて海外に流出し、国内貨幣は一挙に枯渇する。逆にできるだけ鑄造価格を引上げて地金買入れを増大させても、それは、鑄貨の額面価格の引上げに通じるので、過去の計算貨幣による契約を反古にしまい、国内経済の混乱を招くことになる。額面価格は不変のままにして鑄造価格を引上げると、鑄造税をとれず、財政基盤の脆弱な

王室財政はすぐに破綻する。要するに、近代的信用機構の裏打ちのない貨幣制度を維持することは非常に難しかったのである。このことは、地金価値の重しをとり払い、計算貨幣としての役割に徹しきったときに、はじめて貨幣をしてその本来的役割を演じさせえたのではないか、との仮説に私たちを導くのである。重商主義者たちは、あらゆる手段を動員して、このやっかいな貨幣の制御に努めようとした。彼らはけっして貨幣をただちに富と同一視したのではない。それどころか、貨幣現象の困難さに彼らはこだわっていたのである。これは重商主義者マリーンズ (Malynes) のアリストテレスを援用したつぎの言が証明しているだろう。

「自然的富 (natural riches) とは、土地、ブドー樹、森林、牧場のようなもの、人工的富 (artificial riches) とは、貨幣、金、銀、羊毛、毛織物、その他すべての動産および家具」<sup>3)</sup>である。この一切の財貨が1国の富を形成している<sup>4)</sup>。そして「経験はわれわれに、いかに多くの国民が、(自国産の原料をもたずに他国から輸入して) それにもかかわらず、それを製造し、大きな交易にまで拡大して、他国の原料で人びとを働かせているかを示している。そこであらゆる人びとを奨励して、独占に陥ることを避けつつ、国家に対する利益をより一般的たらしめるために、永久にではなく一時的に、若干の特権を与えて新しい発明に向かわすことを考えるべきである。これこそが人々をして、急速に利益を得るべく労苦させるのである。商人はこれに関して、職人、工芸人の労働に対して自らの生活を保証できるように考慮しなければならないのである」<sup>5)</sup>。すなわち、富は貨幣だけではない。

「貨幣とは……財貨という歯車を刺戟し、それを動かす最初の歯車となった」<sup>6)</sup>。

3) de Malynes, Gerald., *A Treatise of the Canker of England's Common Wealth*, London, 1601, p. 5.

4) Malynes, *England's View*, London, 1603, p. 80.

5) Malynes, *Consuetudo, Vel, Lex Mercatoria*, London, 1622, p. 161.

6) Malynes, *The Mainienance of Free Trade*, London, 1622, p. 6.

この重要な貨幣がなぜ王国内にとどまりえないのか、初期重商主義者たちの関心はこの一点に集中していたのである。貿易差額説といい、貿易特権といい、すべてこの貨幣供給源の確保という一点に集約されるものである。この処方箋をめぐる論争が重商主義者の理論を発展させ、貨幣の魔術的な性格の分析に向かわせたのであって、けっして、貨幣のみを富そのものと誤解したのではない。いわんや、商人資本の理論か、産業資本の理論かの区分を後世の理論史家が行うことは空しい。貨幣現象に関する彼らの理解は、のちの古典派経済学よりもある意味でシビアーなものであったからである。

## I 貨幣数量説の背景

悪鑄が王室財政基盤を強化しようとする意図から出たものであることは否定できない。しかし、中世から近世にかけての悪鑄はその大部分が貨幣不足に対処するものであったことも否定されてはならない。ところが、この悪鑄がかえってヨーロッパ各国の貨幣不足を激化させたことも事実なのである。

地金の市場価格よりも鑄造価格が高いときにのみ鑄貨が創出されるという中世から近世への貨幣制度は、重商主義者たちの信奉した貨幣数量説そのものが妥当する世界であった。貿易収支の黒字、自国為替レートの割高は必ず正貨の国内流入を伴い、これは自国における地金価格を下げる誘因として作用する。もし、鑄造価格が従来のままだと、鑄造される貨幣が豊富になり、鑄貨の内在価値＝地金価値の低下とあいまって（価格標準の切下げ）国内物価は騰貴し、ケインズのいう利潤インフレーションが現出しよう。すなわち、貨幣量の増加と物価上昇が平行的に進行するのである。逆に貿易の逆調、自国為替レートの割安は自国から正貨が流出して、自国の地金の不足から地金の市場価格は騰貴するだろう。これが鑄造価格を上まわるようになると、地金はまったく造幣局に持ち込まれなくなる。すなわち、貨幣が新規に鑄造されなくなる。これは経済取引に悪影響を及ぼし、財貨の投げ売り、価格標準の切り上げを通じて、物価全体の下落を導くだろう。つまり、貨幣量の減少と物価下落とが同時進行

するのである。重商主義者たちはこの2つの局面が交互に交替する現象をつねにみていた。貨幣数量説とは、素朴な理論であれ、信用の支えのない鑄貨のみからなる貨幣制度の日常経験する具体的な現実を反映したものにほかならなかったのである。

ふたたびマリーンズを引用しよう。

「貨幣の豊富さが土地を改良し、国内財貨の価格を高め、製造業を増大し、漁業を確立し、外国貿易を維持し、国王の収入を増大し、外国財貨をより安価にし、……一切の交易に関係していることがらを増進させて、国家を富裕にする」<sup>7)</sup>。

「重量、純分、価値づけから成立している貨幣について、金、銀は素材にすぎず、その性質上金銀にすぎないことは明らかである。しかし、価値づけこそは、それに生命を与える精神である。この価値づけには2つがある。1つは国王の公権力によるものであり、他の1つは為替の動きにおける商人によるものである。後者が国王の価値づけに優位し、それを支配している」<sup>8)</sup>。

国王の公権力による価値づけとは鑄造価格の決定である。この公権力の行使を制限するものこそ、あたかも市場メカニズムの外観をとった為替の動きであり、それは外国の銀行家によって支配される、とマリーンズはいう。

「為替に関しては、海外での貨幣の豊富さが為替の価格を上げ、同じく、海外での貨幣の稀少はその価格を下げる、ということは公理であるが、イングランドにおいてはその逆である。貨幣の豊富さが為替の価格を下げ、貨幣の稀少さがその価格を上げるのである。……そこでつぎのようにいえる。貨幣を所有するこれらの銀行業者が貨幣の干満を生み出して、ある地から他の地へと、思うままに為替を支配することは容易であると」<sup>9)</sup>。

「この為替の動きが悪用されて、最近それは、貨幣の豊富、稀少、時の隔り、場所の遠近に応じて価格を上下させる1つの取引きとなった。それが財貨、貨幣の動きを支配し、それを統御するに至り、……わが富の減少、わが貨幣の搬

7) Malynes, *The Center of the Circle of Commerce*, London, 1623, p. 139.

8) Malynes, *Maintenance*, op. cit., p. 81.

9) Malynes, *Canker*, op. cit., 26 ff.

出の根本的原因となった」<sup>10)</sup>。

要するに、貨幣が一般的等価物となって内在価値に従い、その価格標準が安定してくれさえすればよい。しかし現実には、肝心の地金価格が日々変動し、外国為替の使用、悪铸、イタリア銀行による金融操作によって、複雑な動きをしてしまう。この御しがたい難物である貨幣をいかに国民経済的に利用するか、金融的従属国である当時のイングランドの重商主義者たちは抽象レベルでなく、具体的現実の把握に腐心したのである。貨幣の物神性として擲擲されようとも、この眼前の貨幣現象は価値形態論の展開によって制御できるものではなかったのである。

悪铸 (debasement) はこの貨幣不足に対処するために当時とりうる唯一の手段であった。この点とはくに強調されねばならない。

地金価格以上に铸造価格を設定しさえすれば铸造が増えるのだったら、铸貨の額面価格を不変のままにとどめて、铸造税のみ軽減すれば、結果的に铸造価格は上昇する。額面価格から铸造税を差し引いたものが铸造価格だからである。財政的に铸造税の引き下げの余裕がないとき、国家は悪铸に走る。铸貨の品位、重量を低下させることがそれである。

中世イギリス貨幣史の素描がこのことを例証している。

ウィリアム征服王〔在位1066-1087年〕は標準銀 (Standard silver or sterling silver) (1トロイ・ポンド重量あたり純銀11オンス、2ペンス含有。11 oz. 2 dwt. と表示。dwt. はデナリウス・トロイ・重量) 1タワー・ポンド (1タワー・ポンドは1トロイ・ポンドより  $6\frac{1}{4}$  パーセント軽い) から240個のペニー貨を作った<sup>11)</sup>。1タワー・ポンドが5400トロイ・グレイン (grain) であったから1ペンス貨は22.5グレインの重量をもっていた。この1:240の分割システムはヨーロッパ全域をおおう一般的現象であったと思われる。たとえば、低地諸邦の1ポンド・グロート (groat) も当時は240グロートであったし、

10) Malynes, *Canker, ibid.*, pp. 15-16.

11) Feavearyear, 前掲, 邦訳, 20ページ。



フランスでも 1 livre tournois=240 deniers tournois であった。ロンバルディアも 1 lira di imperiali=240 imperiali であった<sup>12)</sup>。また、イギリスでは中世初期にはペニー貨のみが実在であり、ポンドなりシリングなりは実在せず、たんなる計算貨幣 (imaginary money or money of account) にすぎず、それぞれ 240 d. (ペンス), 12 d. を表していた。中世初期には 1 ペニー貨よりも小さな銀貨は存在せず、エドワード 1 世 (1272-1307 年) の治世ではじめてハーフペニー (2 分の 1 ペンス), ファーシング (4 分の 1 ペンス) 貨が鋳造された。シリング貨はずっと後にヘンリー 7 世によって 1504 年にテストーン (testoon) 貨として鋳造されたのである。

ただし、これら鋳貨は流通しているうちに削りとられて軽量化する一方であった。当時はハンマーによる打造であったために、削りとりが容易であったし、削りとられてもなかなか見つけることはできなかったのである。鋳型による鋳造が 17 C 以降導入されたが、それまでは鋳貨は流通中に軽量化してしまう宿命から免れられなかったのである。悪鋳とはこの事実の追認にほかならなかった。

少なくともヘンリー 8 世以前の国家による悪鋳は、財政的理由というよりも、流通中に減価した鋳貨に新鋳貨を適合させる努力以外の何ものでもなかった。もとより、国家は鋳造益をまったくあてにしなかったわけではない。地金価格を上まわる名目価格がもたらす鋳造手数料なり、徴税が国家の重要な収入減であったことは否定できない。それでも、大悪鋳による財政基盤の確立というよりは、すでに流通中の軽量化した鋳貨に新鋳貨を適合させることを意図した悪鋳にすぎなかった、というのがヘンリー 8 世以前の悪鋳の主要な理由であった。軽量化した鋳貨が流通していた状況下で、完全量目をもった新鋳貨を鋳造しても、その新鋳貨は流通に入るところか、退蔵されるか海外に流出する運命にあることは明らかであった。旧鋳貨を回収すれば、この問題はなくなるであろうが、それは国家に財政的負担を強いるものであって、中世の国家の性格からは、

12) de Roover, Raymond, *Gresham on Foreign Exchange*, Oxford, 1949, p. 32.

この負担を国家がかぶるなどとは思ってもよらぬことであったろう。国家としては、わざわざ財政負担になる再鑄造よりも、減貨した流通中の鑄貨に合わせた新規鑄造（地金から鑄貨をつくる）にのみ熱心になったのも当然の選択であつただろう。

悪鑄の理由はこれだけではない。貿易逆調による正貨流出を阻止しようとする意図もあった。正貨流出時には重い鑄貨ほど輸出され、軽量の悪貨ほど国内に残留するものである。正貨流出があると通常地金価格が上昇し、これが鑄造価格（mint price）を上まわるとなると造幣局に地金が引渡されなくなる。事実、新規鑄造のまったくなかった年もかなり多かったのである。こうした貨幣不足、国内価格水準下落による不況打開の意味からも、国家はこうした経済的要請にもとづいて悪鑄に走らざるをえなかったという事情もある。したがって、悪鑄のすべてが商人や生産者から非難されたわけではないことに私たちは注意する必要がある<sup>13)</sup>。

## II 中世イングランドの悪鑄

ポンドの計数と重量とが乖離したのは1299年のエドワード1世の悪鑄がイングランドでは最初であった。彼はタワー・ポンドを243個に分割したのである。1344年にエドワード3世が266個に、1346年に270個、1351年300個、1411年ヘンリー4世が360個、1464年エドワード4世が450個と、計数と重量とは完全に分離することとなった。エドワード4世のときの1ペンス貨は22.5グレインになってしまっていた。すなわち、1タワー・ポンドは計数で20s.（シリング）でなく、37s. 6d. になったことになる。また造幣局に1タワー・ポンドを差出した人は1344年に21s. 受けとっていたが、1464年には33s. 受け取ったのである。ただし、純度の下げはなかった。つねに11oz. 2dwt. (1000分の925)の純分をスターリング銀は保っていて、ヘンリー8世の治世を例外として、これは1920年まで守られていた<sup>14)</sup>。これら悪鑄のいずれもが、商人や議会の貨幣

13) *ibid.*, pp. 36-37.

不足救済を求める声に応じて実施されたものである。

表1 スターリング銀のペニー貨（トロイ・グレイン）

伝統的な重量（8世紀から991年頃まで）	24.00
（991年頃から1275年頃まで）	22.50
1275年頃	22.00
1343年	20.30
1345年	20.15
1346年	20.00
1351年	18.00
1412年	15.00
1464年	12.00
1526年	10.70
1544年	10.00
1552年……（1ポンドあたり純度は1オンス，1ペニー重量）	8.00
1560年……（もとに戻す）	8.00
1601年	7.80
1816年	7.27

〔出所〕 Feavearyear, 邦訳、『ポンド・スターリング』, 456ページ。

1943年の悪鋳時には、100年戦争の重圧から銀入手困難に悩むエドワード3世が、すでに流通している貶貨の改鋳が不能なこと、貶貨流通下に完全重量銀貨製造は馬鹿げたことだとして断を下したものである<sup>15)</sup>。

黒死病後の1351年の悪鋳時にも、エドワード3世は、「貨幣が欠乏したためである」と明言し、外国の造幣局に対抗すべく、銀に高価格をつけ、鋳貨の重量引下げによって、銀流出を抑制しようと決心したとされている<sup>16)</sup>。

貨幣不足にどう対処すればよいのか、は為政者をつねに悩ました問題であった。たとえば、1382年にはリチャード2世〔在位1377—1399年〕は通貨問題委員会につぎの諮問を行っている。

1. なゼイングランドへ金もしくは銀が流入しないのか。またなぜイングランドにある金属が持ち出されるのか。

14) Feavearyear, 前掲, 邦訳, 20ページ。

15) 同上, 28ページ。

16) 同上, 31ページ。

2. 金貨の盗削状態に対応する最善の策は何か。
3. 半ペニー貨とファージング<sup>17)</sup>貨の不足を解消するために何がなされるべきか。
4. 金の価値と銀の価値とを調和させるためにとられるべき最善策は何か。
5. フランダースやスコットランドからの粗悪貨幣の輸入はいかにして防止可能か<sup>18)</sup>。

この諮問については付言を必要とするだろう。1351年の国王による悪鑄は悪性のインフレーションを起こし、低為替レートとあいまって、再度の正貨流出を激しくしたのである。このため、悪鑄に対する世人の不満が強くなり、地金の流入を強化するよりもその流出を抑えるやりかたで貿易を規制するという政策を、悪鑄に代わってとることを訴えたのである。これは、1337年に強化された貿易統制をさらに徹底させることを意味していた。1382年は、イングランドへ商品を持ち込んだ外国商人は港の税関吏の前で、輸入された商品価値の半分に見合うイングランドの商品を購入するための保証人を見つけねばならないこと。輸出される羊毛1袋ごとに1オンスの金をロンドン塔に持ち込むべきこと、これを怠れば3s. 4d. の追加関税を払うべきこと、というものであった。1404年には輸入品の販売代金全部が輸出のためにイングランドの商品購入に費されるべきこと、1404年にはその行為は輸入後の3か月以内に行われるべきこととされたのである<sup>19)</sup>。

しかし、こうした使用条例 Statute of Employment のいくたびかの強化にもかかわらず、有効な成果はほとんどあがらなかった。14、5世紀を通じて貨幣不足に対する不満は鎮静することはなかったのである<sup>19)</sup>。依然として、国家は、国王による発議、議会による発議を問わず、悪鑄に頼らざるをえなかった。もちろん、国内品の輸出義務を課す使用令の強化、すなわち貿易統制の強化と併用しながらであるが、悪鑄の程度も次第に大きくなってくる。1412年の悪鑄

17) 同上、47ページ。

18) 同上、49ページ。

19) de Roover, *Gresham, op. cit.*, p. 43.

もこれまでのものと悲しいほど同じ理由に基くものであった<sup>20)</sup>。表1にもあるように、1412年に対前年比15%、1464年、20%、1526年10%の軽量化となり、1544年—1552年の史上有名な大悪铸期を現出してしまう。

ヘンリー8世による悪名高い大悪铸がはじまったのは1543年からである。それまでヘンリー8世は1526年に悪铸を行っているが、これは従来の貨幣不足への対処という路線上に立つものであった。ところが、1542年にスコットランド、フランスに対する戦争に対し議会は国家財政資金増加を拒否したことから、国王は戦費調達を大悪铸に求めたのである。大悪铸の経緯を年譜風を書くところのようになる。

1543年。標準銀純度を1ポンド・トロイあたり11 oz. 2 dwt (oz=ounce, dwt=denarius weight or penny weight) から10 oz. に下げた<sup>21)</sup>。さらに、铸造税 (seigniorage) を1トロイ・ポンドあたり、従来の1シリングから8シリングに上げたのである。铸貨価格は铸造税と铸造価格 (mint price, 地金持ち込み者に支払う額) の合計であるが、純銀1ポンドあたり铸造価格をすえおいたままであったので、国家の収入は莫大なものであった。なお、トロイ・ポンドはタワー・ポンドより重く、30トロイ・ポンド=32タワー・ポンドである。

1544年。標準銀の純度を9 oz. に下げる。

1545年。上記のものを6 oz. に下げる。

1546年。さらに4 oz. に下げる。結局、テストーン銀貨の含有銀は3分の1になってしまった。この間、1トロイ・ポンドの純銀は £2. 8 s. (2ポンド8シリング) から £3 (3ポンド) の価格に上昇したので、旧貨幣のことがとくが溶解されてしまった。この溶解銀が造幣局に殺到し、铸造希望が増大したが、1546年以降、純銀1ポンドは £7. 4 s. に铸造され、铸造税が £4. 4 s. にも増大したのに、地金持ち込み者には £3 しか渡さなかったのである。このあとインフレと地金供給不足深刻化が生じる。

20) Ruding, Rogers, *Annals of the Coinage of Great Britain and its Dependencies*, 3 vols, 3rd ed., London, 1840, I, p. 254.

21) Hawtrey, R. G., *Currency and Credit*, New York and London, 1923, p. 288.

1547年。1月ヘンリー8世没。エドワード6世、鑄造価格 £3 から £3. 4 s. に上げるが、鑄造停滞。

1549年。テストーン貨と同じ純分(40グレイン)の小額貨鑄造(新グロート)。さらに修道院没収による地金調達のため鑄造活発化。純分40グレインのまま、テストーン貨より重い80グレインの銀貨鑄造。

1551年。純分20グレイン、80グレイン重量の新テストーン貨、さらに純分10グレイン、80グレイン重量のテストーン貨鑄造。国家保有の銀のみから鑄造。国家の国内債務帳消し。この年深刻な鑄貨不足生じる<sup>22)</sup>。

1552年。良貨鑄造が必要との諮問委員会の答申により、鑄造価格を下げる。標準銀1ポンド重量を £3 から £2. 19 s. に。しかし鑄造税 1 s. はそのまま。長く続いた大悪鑄期も終る。地金価格下がるが新鑄造停滞。この経緯は表2でまとめている。

表2 標準銀の鑄造価格(1526-1552年)

	標準銀1ポンドトロイ重量			12 s. のテストーン貨	
	鑄造 £ s. d.	鑄造税 £ s. d.	鑄造価格 £ s. d.	重量 グレイン	銀純分 グレイン
1526年	2 5 0	1 0	2 4 0	128	118%
1543年	2 8 0	8 0	2 0 0	120	100
1545年	2 8 0	1 0 0	1 8 0	120	60
1546年	2 8 0	… … …	… … …	120	40
1548年	4 16 0	… … …	… … …	60	40
1549年	3 12 0	… … …	… … …	80	40
1551年	3 12 0	… … …	… … …	80	20
1552年	3 0 0	1 0	2 19 0	96	88%

(出所) de Roover, *Gresham* p. 54.

この大悪鑄は銀貨の純分が1542年から1551年までの10年間に3分の1に下げられ、1551年発行のテストーン貨などは6分の1になったほどである。加えて、この10年間に発行された種々の鑄貨がなお流通していたために、16C 半ばの

22) *ibid.*, p. 293.

イギリスの貨幣状況は混乱をきわめていた。銀価格が3倍になったのに、物価はそれと同じ速度では上昇せず、2倍になったにとどまる。すなわち、この間、イギリスの通貨の額面価格は内在価値から遊離して章標貨幣 (fiduciary) 化しつつあったのである。しかし、悪貨が一巡すると人々の铸造に対する不信が根強くなり、新規铸造もなく、イギリス国内は慢性的な貨幣不足状態に陥ることになる。1553年メアリー女王はスペインのフィリップ皇太子と婚約して30万ダカット (ducat) 分の地金輸入をスペインから行ったが、効果なく、あとを継いだエリザベス女王が本格的に通貨安定に乗り出すことになった。

1560年9月には、流通中のテストーン貨 (シリング貨) の額面価格を下げ、これに刻印を打ち、刻印のないものの流通を禁じた。40グレインの銀含有量のもは  $4\frac{1}{2}$  d. に、20グレインのもは  $2\frac{1}{4}$  d. に下げたのである。1560年11月には铸造価格を £2. 18 s. 6 d. (1トロイ・ポンド標準銀) に下げ、新シリング貨を重量96グレイン、純分88% グレインで铸造し、これと旧テストーン貨の交換に応じたうえで、1561年4月1日をもって旧テストーン貨を廃貨とするとの布告を出した。同様の手続きが1ペンス以下の小額貨幣にも1561年に適用された。それでもこの作業で国家は財政負担に苦しむことなく、逆に1560年12月から1561年10月までに4万ポンドの純利益をあげたという<sup>23)</sup>。低価格の刻印政策のあと新通貨との交換という二段構えの措置が効を奏したのであろう。

しかし、エリザベスの改革は確かに貨幣の安定をもたらし、外国為替レートも安定ししたが、深刻な支払い手段の不足に悩まされることに変わりはない。とくに小額貨幣不足が深刻であった。このために、物価下落、ヨーロッパの動乱による経済停滞という状況とあいまって、ときの重商主義者たちが不況の原因を貨幣現象に求めようとしたことも自然のことであつたろう。彼らにとって、貨幣不足、貨幣渴望は依然として眼前の事実だったのである。エリザベスは、1601年に貨幣不足に対処するためにこれまでの政策とは反対に铸造価格 (1トロイ・ポンドあたり) を再び £3 に上げ、シリング貨を88% から

23) de Roover, *op. cit.*, pp. 65-66.

86グレインに減少させた。ただしこの純分、重量は1798年まで変更しなかった<sup>24)</sup>。

### III 国際通貨フローリン金貨への挑戦の失敗

イングランドでは、「サクソン時代から18世紀までポンドは銀本位によるものであった」<sup>25)</sup>。中世イングランドの表示はつねに銀貨でなされ、金貨そのものの流通もほとんどなかった。市民革命前でもマリーンズにいわせれば、銀貨500に対して金貨はわずかに1の割合でしかなかったのである<sup>26)</sup>。使用するには高額すぎて、「農夫たちは、金貨を日常取引用ではないという理由で喜ばず、したがってエンジェル金貨(Angel, 6 s. 8 d. ~ 10 s.)の交換にはしばしば1ペニーを与えざるをえなかった」との16世紀の証言がフィーバーイェアー(Feavearyear)によって紹介されている<sup>27)</sup>。

しかし、この事実は大きな意味をもつ。国際商業の発展とともに対外決済用としての金貨使用は頻度を増し、したがって金地金の国際市場価値は増大するのに国内鑄貨需要が小さいことから、イングランドの鑄造価値は国際的にも低く抑えられたままであり、金地金流出に拍車をかけていたこと、せっかく商品輸出によって国際通貨のビザンツ(Besants)、フローリン(Florin)金貨をイングランド商人が入手しても、その金貨の国内吐け口を見出すことができなかったこと等の問題をひきおこしたからである。すなわち、地金形態における金銀比価(市場価値)よりも、鑄貨形態におけるそれの方がイングランドでは低く、このために、フローレンスのフローリン金貨に対してイングランド商人はつねに自国に不利な交換比率をイタリア商人によって受容させられていたのである。

もともと中世ヨーロッパではビザンツ帝国の発行するビザンツ金貨が流通し

24) *ibid.*, p. 69.

25) Feavearyear, 前掲, 邦訳, 33ページ。

26) Malynes, *Center, op. cit.*, p. 22.

27) Feavearyear, 前掲, 邦訳, 36ページ。



ていた。13世紀中頃にはこれに代わってフローレンスのフローリン金貨が支配するようになる(1252年発行)。<sup>28)</sup>「イングランドもこれにならって、ヘンリー3世(在位1216-1272年)が1257年にペニー金貨を発行し、1ペニー金貨(20 d.)ときめた。が、金を過小評価しすぎるとの非難にあい、1265年に24 d. に引上げた。にもかかわらず、この金貨は十数年で流通しなくなってしまった<sup>29)</sup>」。

他方、フローレンスのフローリン金貨は13世紀から14世紀を通じてますます国際通貨としてヨーロッパに君臨していった。フローレンス人がヨーロッパの金融、商業上の覇権を掌中に収め、銀行の設立をヨーロッパ各地で実現させていたからである<sup>29)</sup>。イングランドでは国王の保護下に両替業務を行い、エドワード1世(在位1272-1307年)の戦費を調達し、関税取立てを請け負っていた。彼らイタリア商人はエドワード3世(1327-1377年)から原毛を購入し、それをフランダースで売却、さらに9分の1税として上納された小羊と羊毛を買い入れ、輸出関税を担保に前貸しを行った。外国業務の多くが彼らによって遂行されていたのである。とくにフローレンスの商人宛の手形は19世紀末のロンドン宛の手形ほどの需要性をもっていたのである。1308年にはフローレンスだけで300の毛織物工場、毛織物生産高年間120万フローリン、工場はフランス、フランダース、イングランドにも多国籍的に設立され、原料の羊毛はヨーロッパ全土から入手していたのである。これほどの巨大な経済力を背景に、彼らは「かなりの期間にわたって、彼らのまったく思いのままに為替相場を決めることができたように思われる」<sup>30)</sup>。

このフローリン金貨にはスターリング表示で3 s. がイタリア商人によって要求されていた。これは、エドワード3世がフローレンスの銀行から数十万フローリンを借りたときの返済にあたっての契約である(1339年)。しかも、返済はスターリングで行うべきだとされていた。しかし、これはスターリングにとってきわめて不利な交換レートであった。当時フランスのエキュ金貨(écus)が

28) 同上, 37ページ。

29) Villari, Pasquale, *The Two First Centuries of Florentine History*, London, 1908, p. 331.

30) Feavearyear, 前掲, 邦訳, 37-38ページ。

71トロイ・グレインでイングランドでは3s. 4d. で評価されていたので、54トロイ・グレインしかないフローレンス金貨なら2s. ½d. の値打ちしかないはずだったからである<sup>31)</sup>。

このように過高評価されるフローリン金貨をイングランドで鋳造してみたらどうか、というのがエドワード3世の思いつきであった。フローリン金貨の2倍の重量をもつイングランドのフローリン金貨を6s. とし、その半分の重量をもつ3s. の額面、4分の1の重量をもつ18d. の額面、の3種類のフローリン金貨をフローレンスのそれに刻印されている聖ヨハネ像だけを取り去って、あとはそのまま模した形で鋳造したのが、1344年のことであった。同時にこの模造金貨を法貨化し、イングランドの牧羊業者は国王命令によりその受け取りを強制された。

しかし、結果は裏目に出ってしまった。イタリア人は、イングランド商人との取引きにおいて、「管理された」価値を付与された聖ヨハネ像の刻印されているフローレンスのフローリン金貨しか渡さず、イタリア人が受け取るさいには、イングランドの銀貨しか駄目だとの強い姿勢を従来以上に貫いたからである。このイングランド商人にとっての不利な取引きに加えて、イングランド国内でも損を招くイングランド製フローリン金貨の受け取りを国王によって強制された彼らが悲鳴をあげたのも当然である。国王は6か月後、この計画の失敗を認めて、模造貨鋳造をやめてしまった<sup>32)</sup>。ここに金融的覇権を握る国と、金融的従属にある国との著しい通貨支配力の格差を為政者たちは思い知ったのである。以降、イギリスのイタリア銀行に対する反感が急激に高まって行く。たとえば、エドワード3世はフローレンス人に対する債務返済を拒否した。

これは、フローレンスの銀行にとっても衝撃であった。ナポリ王のローベルト(Robert, 在位, 1309-1343年)も同様の支払い拒否を行ったため、1343年から46年にかけて、フローレンスの3大銀行が倒産してしまったからである。バ

31) 同上, 40ページ。

32) 同上, 41-42ページ。

表3 金貨の略史

铸 貨 名	年	純 度	量 目 (トロイ・グレイン)	額 面 s. d.
ペニー貨	1257	純 金	45.0	1 8
	1265	"	"	2 0
フローリン貨	1343	"	108.0	6 0
ノーブル貨	1344	23カラット3½グレイン	136.7	6 8
	1412	"	108.0	6 8
	1464	"	"	8 4
リヤル貨	1465	"	120.0	10 0
	1544	"	"	12 0
エンジェル貨	1465	"	80.0	6 8
	1611	"	71.1	11 0
ソヴリン貨	1489	"	240.0	20 0
	1601	22カラット	171.9	20 0
2ソヴリン貨	1489	23カラット3½グレイン	480.0	40 0
クラウン貨	1545	22カラット	48.0	5 0
	1546	20カラット	"	"
ジョージ・ノーブル貨	1526	23カラット3½グレイン	71.1	6 8
3ソヴリン貨	1549	22カラット	508.2	60 0
	1642	"	421.5	60 0
ユナイト貨	1604	"	154.8	20 0
	1661	"	140.5	23 6
ギニー貨	1663	"	129.4	20 0
	1699	"	"	21 6
	1717	"	"	21 0
ソヴリン貨	1816	"	122.274	20 0

(出所) Feavearyear, 邦訳, 453-54ページ。

ルディ (Bardi), ペルッツィ (Peruzzi), アッチャイウォーリー (Acciaiuoli) のビッグ・スリーがそれである。この倒産はフランスにあるフローレンスの銀行資産が、フランス王フィリップ6世によって、差押えられたからでもある。エドワード3世に資金供与を行ったフローレンス人がフランスの敵と見なされてしまったのである。それにしても、ビッグ・スリーによってエドワード3世に貸付けられた資金は「1つの王国の富に匹敵する額」<sup>33)</sup>だと評価されたほどの莫大なものであったという。

以後金貨も銀貨と同じく鑄造価格引上げ、悪鑄(軽量化)、額面価格の引上げ、とお定まりのコースを歩むことになる(表3)。が、国内経済の貧しさから、イングランドの金銀比価はつねにヨーロッパ大陸のそれより金に不利に働く状況に変わりはなかった。そこで、つぎつぎと新しい金貨を鑄造して比価調整に努めたが、18世紀に入るまでこの比価の混乱、金貨の流出という宿命からイングランドは免れなかったのである。私たちは、この簡単な表3からでさえ、近代的貨幣制度の樹立にいたるまでの長くて苦しい貨幣整備の営為を読みとるべきであろう。貨幣の安定とは、国内経済力の充実、国家財政の安定、軍事力の強大さ、加えて銀行組織の整備等の種々の要因が結びついてのみ可能であったことをそれは示すものである。

#### IV 外国銀行からの自立意欲

ド・ルーヴァー (de Roover) によってグレンシャムの筆らしいと推定された覚書きがある<sup>34)</sup>。1576年の外国為替に関する諮問委員会でまわし読みされたものらしい。これは、のちにマリーンズ、ミッセルデン (Misselden)、マン (Mun) らのいわゆる初期重商主義論争の種本になったものである。この覚書きは 'For the Understanding of the Exchange' というタイトルをもち、de Roover, *Gresham on Foreign Exchange*, Harvard, U. P., 1948, の巻末に

33) Villani, Giovanni, *Cronica*, Florence, 1945, Libro XI, cap. 88.

34) de Roover, *Gresham, op. cit.*, p. 17.

所収されている。これは、16世紀鋳貨事情を知るうえで重要な文献である。

覚書きは5章構成からなり、第1章は鋳造価値と為替レートとの関係が論じられている。理論的には為替レートは鋳造価格を中心に上下するものだが、現実には、鋳貨ごと、各国ごとの鋳貨の純度、鋳造税の差異の存在によって、正確な為替レートの算定は難しいという。貶貨の流通がこの困難性を倍加しているもので、貶貨を回収し、一様な基準による改鋳が不可欠であると主張する<sup>35)</sup>。

第2章で外国為替の技術的説明、第3章で外国銀行の為替操作とそれによる王国への危害をもたらす24の手口が解説されている。彼ら銀行家は、商品を扱うことなく、外国為替の取扱い、外国為替による貸付けにより富を集積し、重量の重い鋳貨を選りぬき、それを海外に移し、借入れ資金で相場を動かし、為替レートを操作し、独占的取引を行い、商品価格を操作する。これらの手口が王国を犠牲にして彼らを富ます、と告発する<sup>36)</sup>。

第4章は、外国銀行の悪しき作用から自国の利益を守り、押しつけられた自国為替レートの低さによる正貨流出を阻止するための諸政策が提示される。正貨密輸出の取締り強化、高利子禁止、国内生産費の改善、交易条件の改善、等のありきたりの方策とならんで、注目せざるをえないのは、今日でいう一種の外国為替平衡勘定の設立を強調していることである。外国への債権を国内と国外でもち、自国為替レートが不利になったときには、外国の債権の売りで対処し、自国為替レートを高めに誘導し、こうして自国鋳貨の海外流出を防ぐという案である。当時としては、まさに天才的な案であった。さらに貿易業務から外国人を排除して、イギリスの商人のみで貿易業務が営まれるようにしなければならぬことが強調されている。最後の第5章は貿易の黒字、とくに輸出の繁栄が低為替、正貨流出、貨幣不足、経済停滞の苦しみから王国を救済するとの主張を展開している<sup>37)</sup>。

すでに明らかなように、当時の理論家、実務家がどのような現象に悩んでい

35) *ibid.*, p. 10.

36) *ibid.*, p. 11.

37) *ibid.*, p. 11-12.

たのかがこの覚書きには端的に示されている。貨幣の混乱、安定した貨幣の不足、貿易不振、為替レートの目国に対する不利な動き、外国銀行による金融的従属、その総合的帰結としての経済停滞、次第に強烈になりつつある経済ナショナリズム。重商主義者とはこれら諸点への有効な政策を模索した理論家群であった。そうした1つ1つの論点をめぐる論争が彼らの論争であったのにすぎないのに、いちいち彼らが商人資本の利益を代弁するのか、はたまた初期産業資本のそれかを一言一句気にしながら部類分けする作業は、貨幣そのものをもつ困難性、それゆえに近代資本主義のもつ世界システムの編成替え作用を著しく軽視するものであった、といわねばなるまい。

グreshamは市場メカニズムを応用しつつ、その市場外操作をめざした最初の人であるとの評価が後世与えられているが<sup>38)</sup>、その案が採用されたわけではない。

もともと中世では徴利が禁止されていたので、外国為替を経由した徴利という抜け道が日常化していた。たとえば、1年後返済の約束でフローリン貨を貸すとき、銀行は1年後の市場為替レートよりもスターリング安になるように契約する。すなわち、フローリン貨で貸して、1年後にイングランドの貨幣スターリングで返済し、そのときには1フローリン=3s.のレートで返済するとの契約を結ぶ。1年後の現実のレートが1フローリン=2s. 6d.であれば、為替差益という形で銀行の利益となる予定である。為替業務に莫大な資金を投入し、その独占的権益によって相場を動かさうの大銀行にとって、為替業務の知識もなく、銀行ももたないイングランドの商人、国王を顧客とすることは、実際にも有利な取引きであっただろう。イングランドはつねに不利な立場に置かれている、というのが当時のイングランド人の共通認識であった<sup>39)</sup>。旧い使用令（国産品輸出義務）を何度も強化したり、1487年には仮空手形（dry exchange）を禁止したり、1531年には為替業務を国王の許可制にしたり、等の

38) Buckley, H. 'Sir Thomas Gresham and the Foreign Exchanges', *Economic Journal*, XXXIV, 1924, p. 594.

39) Lipson, E., *The Economic History of England*, London, 1934, III, p. 81.

種々の為替禁圧を試みたがことごとく失敗に終わっている<sup>40)</sup>。1551年には、グreshamの父(Richard Gresham, ロンドン市長)によって、その措置がかえって毛織物を売れなくさせるとの反対があったが、王室はそれを押し切って為替の全面禁止措置まで行った。それは、当時の鋳造価格である純銀1トロイ・ポンドあたり £3, 4 s. st. から £6 st. にまであげ、銅貨の大量鋳造を中身とするものであった。これも過去と同じ長期波動を経験する。物価騰貴、為替レート下落を進行させたのである。結局、シティ金融筋から「為替なしに市場を維持することができない」<sup>41)</sup>との抗議を受けて王室はこの政策を撤回してしまった。

そこで、どうすれば、為替の問題を解決できるのか、の諮問委員会が、1564, 1576, 1586, 1600, 1621年と開かれ、ここに初期重商主義論争が開始されたのである。1564年の報告ではイングランドの銀行設立が提案され<sup>42)</sup>、1576年報告書では為替業務を私人からとりあげて国家のライセンスを受けた専門家(Royal Exchanger)の手に移すとの提案が出された。グreshamはこの委員会に参加して、強力に為替平衡勘定の設立を訴えたが無視された<sup>43)</sup>。必要資金があまりにも莫大すぎたからである。

グreshamの平衡勘定案というのは以下のようなものである。

通常、王室の大陸銀行からの借金支払いは、アントワープでロンドン宛手形を売るか、ロンバード街で外国地宛手形を買うかのいずれかであった。しかし、この手段によれば、ロンドンでのフlemish貨(Flemish, フランダースの通貨)の買い需要か、アントワープのブルス(bourse, 立会所)でのスターリング貨の売り圧力かを増してしまい、結果的にイングランドは自ら為替レートを不利化してしまう。低為替はフlemish貨建ての支払い負担を増すこ

40) de Roover, *Gresham, op. cit.*, pp. 181-82.

41) Tawney, R. H., Introduction to Thomas Wilson, *A Discourse upon Usury*, London, New-York, 1925, p. 146.

42) de Roover, *Gresham, op. cit.*, p. 187.

43) *ibid.*, p. 194.

toになり、政府の財政負担を深刻化してしまう。そこでグレシャムは王室の財宝を外国為替の売買に投入するように提言したのである。あるいは銀行を設立して、少なくとも1万ポンドをアントワープの王室のファクター (factor, 王室にかわって、借入れ、支払い業務を委託された人) に託し、もし、アントワープでのロンドン宛手形の売り圧力が強すぎれば(スターリングの為替レートの低下圧力がある)、ファクターはそれに買い向かい、この出費は、もし、大陸の銀行家が為替差益を得るべくこの手形に買い出動してきたら売り浴びせることによって回収する。ロンドンにおいても、フレミッシュ貨の買い圧力が強ければ、売り向かい、こうしてフレミッシュ貨が値下りした時点でアントワープ手形を購入しておく、というものである。要するに、機動的に、効果的に市場に立ち向かうためには、大陸の銀行と同じく大量の資金を動かさなければならないとグレシャムは考えたのである。こうして1万ポンドを要求したのだが、しかし、王室にはこれだけの資金をさく財政的余裕はなかった<sup>44)</sup>。グレシャム案は支持されなかったのである。

しかし、ただ案を提起しただけではない。グレシャムは、王室の資金を使用することなく、実際に為替レートを高めてみせた。1551-52年の間に1スターリングあたり16s. フレミッシュから23s. フレミッシュに上昇させてみせると豪語したのである。彼は、1552年10月、低地諸邦への出航寸前の船を拘束し、積荷のアントワープでの販売代金をグレシャムに預けることを女王命令で確約させたあと出航させた。この代金はコーザンス付きでロンドンで支払うが、市場レート以上で(すなわち、拘束された冒険商人にとっては少ないスターリングしか支払ってもらえない)スターリングで支払うというものであった。グレシャムはこの入手したフレミッシュ貨で王室債務を支払ったのである。イングランドの商人を利用することによって、不利な為替レートを免れた女王は、以降、ハンザ商人の特権を奪い、新たに冒険商人 (Merchant Adventures) に種々の特権を与えて、この種の資金操作を強制して行くことになる。これも、グ

44) *ibid.*, pp. 225-27.



レシャムの献策による<sup>45)</sup>。要するに、グレシャムのねらいは、アントワープでロンドン宛手形を買い、スターリングをアントワープのブールス (bourse) に投入するという行動を阻止することであった。アントワープでスターリング売りをする商人のリストを彼は作成し、そのような商人を脅迫もしたという<sup>46)</sup>。グレシャムは1553年5月にも同様の強硬措置をとっている。このときは7万ポンドもグレシャムは入手し、1スターリング貨あたり23 s. 4 d. グロートの支払い約束をした。こうして市場レートは22 s. グロートへとスターリングに有利に上昇したのである。

ところが思わぬ余波が出てしまった。急激な自国為替レートの上昇から、イギリスの羊毛、毛織物が売れなくなり、国内物価の下落が進行して、これら業者の倒産が相次いだのである。イングランドの冒険商人たちは、この負担の見返りに強力にハンザ商人の追い出しを女王に要請し、1577年と、59年に請願行動を起こしている。また、グレシャムのこの強行策は1560年、1561年ととられ、あとはゆっくりと支払い（あまり早くアントワープに支払うと為替レート低下に通じるため。これもグレシャムの献策による）、1574年に完済したのである<sup>47)</sup>。

マリーンズは、1600年の委員会に参加し、グレシャムのように間接的に為替レートを誘導することは不可能だと主張した。むしろ、為替の直接統制、良貨の鑄造によるイングランドの交易条件の改善策を考えていたのである。自国の為替レートの上昇がそのために不可欠であるが、それは政府ライセンスのある業者に為替業務の独占権を付与することによって可能であると彼は考えたのである<sup>48)</sup>。確かに、過去の失敗例をマリーンズはあまりにも軽視しすぎ、イングランドの支配の及ばない外国金融市場で為替をどのように直接管理すればよい

45) *ibid.*, pp. 219-22.

46) Burgon, Joho William, *The Life and Times of Sir Thomas Gresham*, 2 vols, Lonond, 1839, I, p. 99.

47) de Roover, *Gresham*, *op. cit.*, pp. 223-25.

48) Malynes, *Center*, *op. cit.*, p. 121.

のか、といった点についてもマリーンズ案は非現実的すぎる。それでも、悪铸によるインフレーションの悪効果についてマリーンズがもっとも批判的であったことを無視すべきではないだろう。物価の安定を考える重商主義者もいたのである。

逆にミッセルデンは、悪铸による物価上昇効果を評価する。物価上昇局面が経済不況を緩和させるというのである<sup>49)</sup>。彼は過度の独占を批判する一方で、過当競争の害悪をも重視し、為替の長期的低落と国内物価上昇というインフレーション効果に景気浮揚を認めるというこれも無視しがたい見解をもっていた。悪铸の理論的擁護がミッセルデンによって公然と提起され、以降、この種の論争がマンの時代まで続くことになる。ミッセルデンは、為替操作、管理、統制は不可能であるとの現実認識をもっていたのである。

こうした論争は、ド・ルーヴェーによればトーマス・マンにより結着がつけられたという<sup>50)</sup>。マンはもはや為替の高低に一喜一憂せず、大陸銀行の為替操作力を信じず、ただ、個別取引でなく、総体としての貿易差額を重視し、輸出を振興させることが肝要であるとの論を提起したのであった。『外国貿易によるイングランドの財宝』<sup>51)</sup>は初期重商主義論争の総括をめざし、成功も収めたものではあったが、すでにこのときには、大陸の銀行の勢力も減え、アメリカからの銀流入によりイングランドの貨幣飢饉も過去のものとなりつつあり(1666年鑄造税が廃止された)、貨幣価値もかつての大幅な乱高下を演じなくなっていた。問題が完全に消失してしまったわけではないが、大陸の銀行に代わり国内の金匠(Goldsmith)の貨幣支配力が次第に強くなった(国内手形割引きの慣習が定着する)ことがこの状況の好転に大きく寄与したのである。

しかし、私たちは、グreshamの主張の方に、より強く中世イングランドの置かれていた地位の反映をみるべきであろう。

49) Misselden, Edward, *Free Trade* 1622, p. 106.

50) de Roover, *Gresham*, op. cit., p. 266.

51) Man, Thomas, *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664, 渡辺源次郎訳, 『外国貿易によるイングランドの財宝』東大出版会, 1965年。

グレシャムによれば、輸入を上まわる輸出を実現した国のみが、対外バランスをもち、このバランスを貨幣市場に投じることができる。このバランスで外国人に中・短期の貸付けを行うことができる。こうして債権国は為替取組みに有利な地位を占め、自国貨幣を防衛し、債務国の貨幣を投機的に扱うことができる。しかも、短期資金を引上げるとの脅しを債務国にかけ、新規貸出しを抑制することによって、政治的にも有利な地位を占める。こうして、債権国はますます強く富み、債務国は放置すればますます弱体化するのである。債務国の資本蓄積はこうして阻害されてしまう。加えて、大陸の巨大銀行により債務国は自国の金融機関の設立すらできないでいる。このような状況下で、イングランドのなすべきことは、まずもって金融的自立である。自国商人の保護、外国貿易の繁栄、為替取引所の創設、銀行の設立、イングランドの債権国への転化、貿易と金融実務、理論に通じた人材の育成<sup>52)</sup>、等々のグレシャムの主張点は、経済ナショナリズムの積極的発露であり、イングランドの近代への登場前夜の表現であった。

グレシャムは1519年に生まれ、華やかな中年期に比し、晩年は寂しかった。それでも彼は私財を投げうって王位取引所 (Royal Exchange) とカレッジ (Gresham College) を作ったのである。

52) de Roover, *Gresham, op. cit.*, pp. 262-65.